

HTT033-P04

会場:コンベンションホール

時間:5月25日 16:15-18:45

## 湖沼デルタの地形と堆積物から推定した過去の湖水位：京都市南部，巨椋池を例として

### Past water level of Lake Ogura, Kyoto Prefecture, reconstructed from the form and deposits of a lacustrine delta

伊藤 有加<sup>1\*</sup>, 小口 高<sup>2</sup>, 増田富士雄<sup>3</sup>  
Yuka Ito<sup>1\*</sup>, Takashi Oguchi<sup>2</sup>, Fujio Masuda<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 東京大学大学院 新領域創成科学研究科, <sup>2</sup> 東京大学空間情報科学研究センター, <sup>3</sup> 同志社大学 理工学部  
<sup>1</sup>Grad, The University of Tokyo, <sup>2</sup>CSIS, The University of Tokyo, <sup>3</sup>Doshisha University

京都市南部には、昭和の初めまで巨椋池と呼ばれる自然の遊水地があった。約400年前(1594年~1596年)の豊臣秀吉による「太閤堤」の構築以前には、池には東方から「宇治川」が直接流入していた。地下地質ボーリングデータ(関西圏地盤情報データベース, 2010)から作成した層相断面図の解析から、当時のデルタの堆積物が認められた。ここでは、厚さ2.0~4.0mの上方粗粒化を示すデルタ堆積体が認定でき、岩相から砂礫質の頂置層、砂質の前置層、泥質の底置層と湖底の堆積物を識別できた。頂置層と前置層の境界面の高度の変化から湖水面の高さの変動を復元した。また、地形の解析から宇治川デルタの位置と形状を推定し、周囲の地形や地質との比較から湖面の範囲を認定した。

約400年前(ステージ1)以前には標高12.0~13.0mに湖面があり、それ以前(ステージ2)には標高13.0~13.5mに湖面があった。太閤堤の構築によって湖面標高が2.0m低下したことになる。ステージ1の巨椋池に形成されていたデルタの平面位置は、数値標高データ(5mメッシュ)を用いた地図作成により推定できることがわかった。すなわち、宇治市槇島町付近において、現在の宇治川から北西に長さ1.6km、幅200~300mの細長いデルタを復元できた。この形はこの地域の「条里区割図」での条里が見られない場所、すなわち、田畑として利用できなかったところと一致する。一方、湖面標高がさらに高かったステージ2の時代のデルタは不明である。推定したステージ1とステージ2の湖面標高と一致する、当時の湖岸と考えられる崖線が、現在の巨椋池干拓地の南岸に認められる。これらの標高値とGISを用いて2時期の湖面の範囲を推定したところ、中世以前(人間が治水事業を行うより以前)の湖域は、東は京都市伏見区向島から久御山町佐山地区に至る範囲に達したことがわかった。

キーワード: 湖沼デルタ, 湖水位, 巨椋池, 宇治川, 地下地質ボーリングデータ

Keywords: lacustrine delta, water level of Lake, Lake Ogura, the Uji River, borehole data